

ふくしま 再生 短信

水力エネ先進地・桐生訪問

※ 今に生きる〈水車米〉 ※



2019年4月18日、菅野宗夫さん・千恵子さん夫妻、八下田好一さんと記者、計4名の有志は水力エネルギーの先進地・桐生を訪問した。午前10時最初の訪問地「和平茶屋水力発電所」(写真1)に到着。案内の労をとっていただいたのは桐生市黒保根支所産業振興課・関口武久さん。桐生は京都西陣と並ぶ高級織物の産地であり、江戸期から水車を活用した技術開発でも国内産業を牽引してきた。桐生市は豊富な歴史遺産を背景として水力発電の普及と実践に注力している。

「和平茶屋水力発電所」は発電開始から15年、「和平茶屋森林公園」に隣接しており、公園内のバンガローや管理棟の消費電力を全て賄った上で余剰電力



水車と精米

米作が始まった弥生時代にも上流階級は石臼を使って精米した「白米」を食

は東京電力に売電、最大出力は22KW。「取水口まで登りますか」との関口さんの呼びかけに皆「はい喜んで」と良い返事。高低差70メートルを歩き取水口のある治山ダムに到着後関口さんから説明を伺う(写真2)。そもそもの事業主体は平成合併前の黒保根村、草の根の心意気に痛く感動しました。

昼食は黒保根の美味しいうどんをいただいて午後の目的地大間々町の小平の里・親水公園にある「野口水車保存館」(写真3)へ。「野口水車」は明治の末期に材木商・野口金太郎が建造しその後1955年頃まで半世紀近く製粉・精米の施設として役立ってきた。1990年水車施設一式が野口家から寄贈されたのを契機として精巧なからくりが復元(写真4)、精米が行われ「野口水車米」として販売されている。精米装置に見入る宗夫さんの姿(写真5)が記者の脳裏に今も焼き付いています。(文責&撮影・若林一平)

野口水車保存館(写真3)へ。「野口水車」は明治の末期に材木商・野口金太郎が建造しその後1955年頃まで半世紀近く製粉・精米の施設として役立ってきた。1990年水車施設一式が野口家から寄贈されたのを契機として精巧なからくりが復元(写真4)、精米が行われ「野口水車米」として販売されている。精米装置に見入る宗夫さんの姿(写真5)が記者の脳裏に今も焼き付いています。(文責&撮影・若林一平)



していた。しかし白米人口が画期的に増えたのは江戸の元禄期、生活水準の向上である。無論上級武士をはじめ富

裕層限定だが、広尾の辺りにも精米用の水車が立ち並んだ。